

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

すいかにしんしょう

（水火一信抄）

新版
1871
〜
1872

うえのどのごへんじ すいかにしんしょう

上野殿御返事（水火二信抄）

けんじ ねん がつ にち

建治 4 年（'78） 2 月 25 日 57 歳 南条時光

いものかしら 串 柿 や ごめ くり 筍 酢 筒 た

蹲 鴟・くしがき・焼き米・栗・たかなな・すづつ、給び

そうら お

候 了わんぬ。

がっし あいくだいおう もう おう いちえんぶだいしぶん いち

月氏に阿育大王と申す王おわしき。一閻浮提四分の一を

掌 握 りゆうおう 従 あめ こころ

たなごころににぎり、竜王をしたがえて雨を心にまかせ、

きじん 召 使 たま はじ あくおう のち

鬼神をめしつかい給いき。始めは悪王なりしかども、後に

ぶつぼう き ろくまんにん そう ひび くよう はちまんしせん いし

は仏法に帰し、六万人の僧を日々に供養し、八万四千の石の

とう 建 たも だいおう かこ 尋 ほとけ ざいせ

塔をたて給う。この大王の過去をたずぬれば、仏の在世に

とくしようどうじ

むしようどうじ

ふたり

幼

ひと

つち

もちい

徳勝童子・無勝童子とて二人のおさなき人あり。土の餅を

ほとけ

くよう

たま

いっぴやくねん

うち

だいおう

う

仏に供養し給いて、一百年の内に大王と生まれたり。

ほとけ

ほけきよう

対

そうら

仏はいみじといえども、法華經にたいしまいらせ候え

ほたるび

にちがつ

しょうれつ

てん

ち

こうげ

ほとけ

くよう

ば、螢火と日月との勝劣、天と地との高下なり。仏を供養

くどく

況

ほけきよう

つち

餅

してかかる功德あり。いおうや法華經をや。土のもちいを

進

ふしぎ

況

種々

果もの

まいらせてかかる不思議あり。いおうや、すずのくだ物を

飢 渴

飢

くに

や。かれはけかちならず、いまはうえたる国なり。これを

思

しゃかぶつ

たほうぶつ

じゅうらせつによ

守

もつておもうに、釈迦仏・多宝仏・十羅刹女、いかでかまぼ

たま

らせ給わざるべき。

いま とき ほけきよう しん ひと
そもそも、今の時、法華經を信ずる人あり。あるいは火の

しん ひと
ごとく信ずる人もあり、あるいは水のごとく信ずる人もあ

ちようもん とき 燃 思 遠
り。聴聞する時はもえたつばかりおもえどもとおざかりぬ

捨 ころ みず もう 退
ればすつる心あり。水のごとくと申すは、いつもたいせず

しん とき 常 退 訪
信ずるなり。これは、いかなる時も、つねはたいせずとわせ

たま みず しん たま 尊
給えば、水のごとく信ぜさせ給えるか。とうとし、とうと

し。

真 家 患 患 患
まことやらん、いえの内にわづらいの 候なるは。よも

きじん 所為 そうら じゆう 羅 刹 によ しんじん 分 際
鬼神のそいには候わじ。十らせち女の、信心のぶんざいを

おんこころ

そうろう

きじん

ほけきよう

ぎようじや

御心みぞ候らん。まことの鬼神ならば、法華經の行者を

悩

頭

破

思

きじん

そうろう

なやましてこうべわれんとおもう鬼神の候べきか。また

しやかぶつ

ほけきよう

おん

虚

ごと

そうろう

深

思

釈迦仏・法華經の御そら事の候べきかと、ふかくおぼし

そうら

きようきようきんげん

めし候え。恐々謹言。

にがつにじゅうごにち

二月二十五日

にちれん

日蓮

かおう

花押

ごへん

御返事